

経済学論纂（中央大学）第52巻第4号

2012年3月22日発行

明治期ドイツ留学生，橋本 春（Hashimoto Hasime） の生涯

——鷗外記す「今其の人を見る個儻愛す可し」と——

金 田 昌 司

明治期ドイツ留学生，橋本 春（Hashimoto Hasime）の生涯

——鷗外記す「今其の人を見る個儻愛す可し」と——

金 田 昌 司

- I はじめに
- II 春の生い立ちと天津留学
 - II-1 父，綱常の幼少・青年期
 - II-2 春の天津留学
- III ドイツ留学へ
 - III-1 ベルリンからヴュルツブルクへ
 - III-2 石黒忠恵・谷口謙・森林太郎との対面
 - III-3 「滞在届け」・ヴュルツブルク大学医学部学籍登録および学友たち
 - III-4 小池正直と「ベルリン賤女」の書簡
- IV ミュンヘン留学の挫折と失意の帰国
- V おわりに

I はじめに

かつて筆者は「地域国際化とまちづくり」をテーマとして、在留外国人の地域類型分析、地域国際化への政策形成、国際交流時代と姉妹都市づくり——大津・ヴュルツブルクの事例——、国際化時代と歴史素材の活性化—鷗外『舞姫』モデル、武島務と秩父市の事例—を内容とする拙著を公刊した¹⁾。とりわけ、森林太郎（鷗外）の親しき友であり、医学研究の志し半ばでドレスデンの地で病に倒れた武島務のことは忘れることの出来ないことである。幸いなことに、かれの最後の職場であった「ゼーリッヒ & ヒレ社」が今日、ジュッセルドルフに本社を置く欧州最大のティー商社「ティーカンネ社」として営業していることである²⁾。また、当方がヴュルツブルク大学での在外研究中に知りえたことだが、当大学は明治期以降多くの日本からの留学生を受け入れ、かれらは帰国後、さまざまな分野で明治の近代化に役割を果たしたことである。とりわけ当大学医科大学は幕末に来日したシーボルトの母校でもあり、多くの医学留学生が勉学に励んだ。後の陸軍軍医総監を務めた橋本綱常もその中の一人であるが、かれの在籍から十四・五年後、父

1) 金田（1993）182-252ページ。

2) 上掲書 140-181ページ。

の後をついで、息子の橋本春（本名、長勝）が同医科大学に学ぶこととなった。しかし、春の生涯について紹介された資料は、きわめて少なく、かつて森林太郎（鷗外）が『独逸日記』において³⁾、「倂儻愛す可し」（てきとう：才気があってすぐれていること—『広辞苑』）と書き残した青年、春とはどんな生涯を送った人物であろうか。これが筆者の最初にかれの生涯に関心をもつことになった理由である。それは、1997年ヴェルツブルク大学での在外研究中のことであった。帰国後、春に関する資料収集を始めたが、わずかに宮岡謙二の『異国遍路 死面列伝』⁴⁾および『異国遍路旅芸人始末書』⁵⁾中での春の留学挫折の断片的記事および藤代幸一の『海を越えた日本人名事典』⁶⁾での記載程度であった。明治期の留学生の中、北里、鷗外等のように光りを放つ人々に対して武島務や春は忘れ去られた影の人々であるが、橋本春の名は高橋陽一による石黒忠恵宛ての「小池正直」書簡の発見についての記事が「朝日新聞」紙上に掲載され世の注目をひくことになった⁷⁾。それを契機に春についての研究が鷗外との関係において、山崎國紀⁸⁾、林尚孝⁹⁾、高橋陽一¹⁰⁾、上田正行¹¹⁾等によって進められて来た。

本稿では、春自身が残した資料等を探索することは、かれの帰国後の闘病生活から推察して断念し、上記の先行研究を参照にしつつかれのドイツ留学時代に関わった人々との相関関係に軸足を置いて略年表（付表、論文末）を作成し、若干の分析を試みることにしたい。なお、かれのドイツ留学前および帰国後の状況については、橋本綱常の伝記である『橋本綱常先生』¹²⁾（以下、橋本伝記と略称）により、留学生の学籍登録および住所は森川潤（2008）によった。

II 春の生い立ちと天津留学

II-1 父、綱常の幼少・青年期

橋本長勝（幼名、春。以下、この親称で記す）は、1867（慶応3）年、父、橋本綱常、母、操子の長男として福井で誕生した。周知のように、父親の綱常は1845（弘化2）年7月24日から1909年（明治42）年2月18日までの65年の生涯を送ったが、その生涯は陸軍軍医総監、初代日本赤十字

3) 森（1980）119-120ページ。1887（明治20）年9月16日。

4) 宮岡（1954）112ページ。

5) 宮岡（1978）226-226ページ。

6) 富田（1985）469ページ。

7) 山崎「『舞姫』モデルの消息記す」『朝日新聞』（大阪版）2005年2月24日。

8) 山崎「鷗外の恋人は『賤女』だった」『文藝春秋』2005年6月号。（2007）93-98ページ。

9) 林「『鷗外と手切』に異論」『朝日新聞』2005年7月6日。

10) 高橋（2006）3-4ページ。

11) 上田（2006）201-207ページ。

12) 日赤病院（1936、1994）。

病院院長等々を歴任した明治期における偉大なリーダーの一人としてその名を歴史に留めている。また、家系は清和源氏の流れを汲み、越前藩医橋本長綱の四男として生まれ、長兄には、後に志士として有名な橋本左内がいる。後の父の春に対する教育方針は綱常自身が受けた教育とも深く関連するものと推測出来るのでその点を「橋本伝記」から抽出して見れば、次のような諸点を挙げる事ができよう¹³⁾。

- 1) 綱常は年齢5・6歳頃には、漢学を三人の師から受け始め8歳で長兄左内からも受けている。
- 2) 父長綱の没後、藩医を継いだ長兄左内が御書院番に任じられ藩医を辞したので綱常が若干11歳で医業を継承し13歳から藩立医学所に通学し医学・薬学の見習いとなった。
- 3) 14歳を迎えた1858(安政5)年には和蘭文典を学び、翌年には仲兄綱維から和蘭学を修めた。このような修業は日本医学の将来にとって蘭学の修得が不可欠であるとの認識によるものであろう。その後、幕末の激動期を長崎の蘭人塾、江戸の松本良順(松本順)塾等で蘭学修業に専念した。
- 4) 綱常は1869(慶応2)年、25歳で福井藩剣道師範鰐淵三郎兵衛の長女操子と結婚し、翌年、長男春が生まれた。幕末から明治維新の激動期を会津役への従軍や大阪遊学で過ごした後、軍医寮出仕となり、大阪に居住したため1871(明治4)年、夫人と春および綱常の母堂(梅尾刀自)は福井から大阪へ移住することになった。しかし、同年末には綱常は東京勤務を拝命したため単身赴任したが、翌年早々には東京早稲田での家族一同の生活が始められた。だが、綱常の生活は落ち着くことを知らず、7月にはドイツ留学に出発するのである。綱常28歳のときである。
- 5) 綱常の留学生活はベルリン医科大学に始まり、ヴュルツブルク、ウィーンの各医科大学での研修や普国軍医制度の調査等で1876(明治9)年4月まで続き、5月に帰国した。この留学から得た成果は多大であり、ドイツ医学の優秀性を体得し、次世代のドイツ留学推進の必要性を実感したことは明らかである。帰国後、かれの日本医学の発達に果たした貢献は高く、近代医学の功労者として名を残した。
- 6) 陸軍の省命とは言え、このような長期間に渡る父親不在は幼少期の春にどのような影響を与えたかは定かでないが夫の留守を守る明治の母親の苦勞の一端を感じるどころである。また、春がどのような小学教育を受けたかは定かでないが両親、とりわけ上述のような父親の家系や教育経験から見て春は幼少期から漢学教育を受けたであろう。いずれにしてもかれの教育環境は春の人間形成にとって最適な環境が用意されたことであろう。

13) 上掲書 133-136, 471-476ページ。

II-2 春の天津留学

4年間にわたるドイツ留学から帰朝した綱常は、帰国後、陸軍軍医監（大佐相当、1877年）、東京大学医学部教授（1878年）等の重職の任にあった。1879年、春の将来を熟慮した上と思われるが、漢学修業のために天津に留学させる決断をした。春は13歳であった。この決断には、上述のような綱常自身の幼少期における漢学修業の重要さの認識と同時に現地で春の勉学や生活指導を引き受けた領事竹添進一郎の助言によるものと思われる。竹添は熊本藩の医師竹添筍園の息子として綱常と同世代の1845（弘化2）年の生まれであり、明治政府に出仕し大蔵・外務両省に勤務していたが、綱常の漢籍の師匠でもあった¹⁴⁾。この点について「橋本伝記」は次のように述べている。すなわち、「先生は少年の時、既に漢籍を習われたが、後には東京に於て竹添進一郎氏に就いて論語・詩経・左傳等を聴講されたのが明治十年代のことで、當時、先生は市ヶ谷見附の住宅から一週一回竹添氏の宅を訪れて講義を聴き、又時々自宅に竹添氏を聘して、講筵を開き、家族知人門下生にも列座せしめられた。好きであったのであるが、修業好きであつたのであるが、修養に資せられたもので、特に詩経に熱心であった」と¹⁵⁾。したがって春もこのような厳粛な雰囲気の中で漢学修業に親しんだことは明らかである。

天津における春の留学生活がどのようなものであったかは定かでないが、竹添の指導のもとに父の期待に応え漢学修業の成果を着々と上げていたことは明らかである。しかし、その反面、息子も将来、自分と同じ医学の道に進めさせたいと願うならば、天津留学とは別の進路も選択出来たはずである。よく知られているように森林太郎（鷗外）の場合は1873（明治6）年11月、入校試問を受け、第一学区医学校（現東京大学医学部）予科に実年齢を2歳偽り、11歳で入学し1881（明治14）年に19歳で本科を卒業しているので、春の場合も同様な進路の選択の方が後のドイツでの留学生生活を容易にしたことであろう。

III ドイツ留学へ

III-1 ベルリンからヴェルツブルクへ

春は天津留学から2年で帰朝した後、数年のブランクがあるが1884（明治17、以下、和暦省略）年、父の欧州出張に同伴して私費留学生としてドイツ留学に旅立った。さらに、同行者の中には旧藩主松平康莊侯、第二医院助手難波一、郷誠之助、岩佐新等の青年学徒がいた¹⁶⁾。

14) 竹添進一郎は後に1882年の朝鮮への弁理公使として京城に勤務中に「甲申政変」が勃発したことで知られる。

15) 日赤病院（1936）162-163ページ。

16) 郷誠之助は1865年生まれで春より2歳上であり、官立東京英学校（後の一高）、東京大学を経てドイツに留学した。1884年冬学期から1890年冬学期まで7年間をハイデルベルク大学に学籍登録し、哲学博士号を授

1884年2月16日、大山巖陸軍卿を団長とする欧州使節団は横浜を出航し一路欧州を目指した。3月26日ナポリ港に上陸し、イタリア、フランス各地を視察し7月13日夜、ベルリンに到着した。この長旅で春は他の留学生同様、深い感銘を体験し、これから始まる留学生活への決意を新たにしたに違いない¹⁷⁾。

綱常は春の留学先としてヴェルツブルク大学を選んだ。それは綱常が同大学での留学経験者であったことに大きく起因しよう。春の下宿先もかつて自分が世話になった家主(1888年10月28日に小池正直が訪ねた Frau Knaub と推定できる)に依頼したことはほぼ間違いない。この計画にしたがって春はベルリンを離れヴェルツブルクに向かうことになるが、その時点はいつであろうか。以下、この問題について時間の推移により区分して考えることにしたい。

1) ベルリン到着日(1884年7月13日)から森林太郎の綱常訪問日(同年10月12日)以前

この間に春がベルリンからヴェルツブルクへ向かう可能性はきわめて高いと見られるが、その推定根拠第1点は、林太郎がベルリン滞在中、春とは会えず、両者の初対面は1887年9月16日、ヴェルツブルク駅頭である(鷗外『独逸日記』¹⁸⁾)。もし、春が林太郎のベルリン滞在中、当地に居たとすれば、父、綱常は春を林太郎に引き合わせ息子の指導を依頼したに違いない。その証拠に林太郎が春に初めて会った日の日記に「春余と書を寄せて相慰すること已に久し。今其の人を見る個儻愛す可し」¹⁹⁾と記したことからも明らかである。

その推定根拠の第2点は、後年、1888年5月5日付けのヴェルツブルク市公文書資料館(Stadtarchiv Würzburg)に残されているかれの「滞在届け」中の“4 Jahren hier”の“hier”はヴェルツブルク市内を意味し、時間的整合性が得られる。なお、この点は後述したい。

しかし、かれのベルリンからヴェルツブルクへの転居をこの期間に設定した場合に1つの問題が生ずるであろう。それは近年、明らかにされた小池から石黒宛の書簡(1889年4月16日付け)に於ける春と「ベルリン賤女」との関係が綱常、春一行がベルリンに到着した1884年7月13日から10月12日以前の最長でも3ヵ月以内に成立しなければならなくなる。これは、父の監視下でありドイツ語能力も高いと思われぬ17歳の青年の行動と判断することは不可能ではないが難しい。

2) ベルリン到着日から石黒・谷口・森と春との初対面(1887年9月16日)以前

綱常が帰国しても春はベルリンに滞在した場合である。この場合の滞在期間を確定することは

与され1881年に帰朝した。帰国後、日本運送、日本鋼管等の社長を経て、1930年に日本商工会議所会頭となり戦前における日本財界のリーダー的存在であった。また、岩佐新も郷と同年生まれであり、1885年冬学期からミュンヘン大学に学籍登録し、その後、ハイデルベルクやフライブルク大学で学び、帰国後は告成堂病院長や貴族院議員として活躍した。

17) 日赤病院(1936)41-44ページ。

18) 森 前掲書 119ページ。

19) 森 上掲書 120ページ。

難しいが、もし、1年以上の滞在であればベルリン大学医学部への学籍登録が未登録なのも不思議である。しかし、滞在期間に比例してドイツ語会話力も堪能となり男女を問わずさまざまな人々と交際する機会が増加し、特定の女性と親しくなったとしても不思議ではない。この場合は次のような推論が出来よう。

① 上記の林太郎の綱常訪問頃、春は、たまたまベルリンを不在また病気等の理由で林太郎に会えず、それ以後もかなり長くベルリンに滞在し、春はある女性と親しくなった場合であり、その場合には上記「滞在届け」中の“hier”はヴェルツブルクではなくドイツを意味することになる。しかし、春はヴェルツブルクに転居した後も、その女性と親しくしていたと推定されるが、彼女に会うためにヴェルツブルクーベルリン間を往復したことになる（両都市は『独逸日記』1887年9月16日の記録によれば、午前8時ベルリン・アルトナ駅発、夕8時ヴェルツブルク駅着の時間距離）。もっとも、女性も春のヴェルツブルクでの生活開始後、同地に転居していたとすれば話は別である。

② もし、小池の言う「ベルリン賤女」が「ベルリン生まれの」あるいはベルリンに住んでいた」という意味であるとすれば、春と女性との関係はヴェルツブルクに春が転居してからでも容易に成立出来たことである。いずれにしても事実として言えることは、春がある女性と親しくなり、その噂が綱常の耳にも達し、父の悩みの種となっていたことである。林太郎とエリーゼの関係とも一脈相通じるものを感じる。春に対する小池の対応については後述したい。

Ⅲ-2 石黒忠恵・谷口謙・森林太郎との対面

1887年9月16日、石黒・谷口・森の三人は、カールスルーエに於ける第4回赤十字国際会議出席のためヴェルツブルクに途中下車し、春等が一行を出迎えたことは『独逸日記』によりよく知られている。さらに、翌日の17日、午前中の春の居宅訪問および市内見学と午後のマイン河下流のファイツヒョツホハイム (Veitshöchheim) の名園へ出掛けたことも同日記から明らかである²⁰⁾。筆者も1997年、ヴェルツブルク大学での在学研究中、かれらの見学先を散策し往時を偲んだ²¹⁾。

春の居宅を訪問した時のことを林太郎は「橋本君の居を訪ふ。総監も亦曾て此家に住みきと言ふ。」²²⁾と書き残している。筆者も長らくこの文章に深い意味を読み取れなかったが、近年の高橋陽一による「石黒日乗」の研究成果によれば²³⁾、この日に春の下宿先を訪ねたのは、林太郎だけではなく石黒も同行したことが明らかにされ、さらに、当然、谷口も同行したであろう。恐らく

20) 森 120ページ。

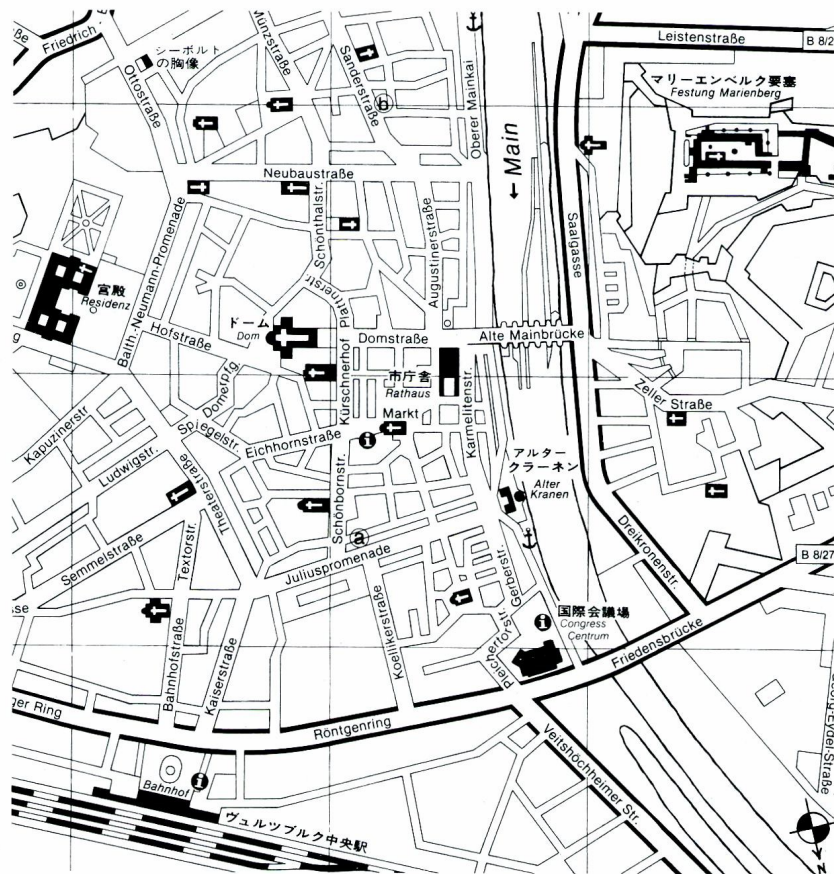
21) 金田 (2003) 144-156ページ。

22) 森 前掲書 120ページ。

23) 高橋 (2006) 4ページ。

石黒は今回のドイツ訪問の際に、綱常から春の生活状況を見聞することの依頼を受けていたものと想定される。高橋による「石黒日乗」の当日の記録として紹介されているつぎの春の下宿の主婦の話に石黒は取りあえず安堵したことであろう。すなわち、「媼語ルニ綱常君ノ事ヲ以テス、十四年前綱常君此媼ノ親族ノ家ニ住シ勉強以テ他人ノ手本トナルニ足レリ、今、春君家ニ寓スルモ亦タ勉強シ且性健宜シク此事ヲ両親ニ報ゼラレヨト」²⁴⁾と、この記録からは勉学に勤しむ春の生活状況を彷彿させるのみであり、ここには後日の「ベルリン賤女」との関係性を漂わせるものは見られない。もし、そうだとすれば、春の女性問題はこの時点以降に深刻化した可能性も否定できないが、この点も後述したい。

図1 今日のヴュルツブルク市街図



注) ①、②は綱常の1875年および1876年当時の居住地道路入り口を示す。春の「滞在届け」のHöchbergerstr. は地図外で南東方向に位置し、1889年夏学期学籍登録住所、Bahnhofstr. 15は駅前から直進方向に位置する。
出所) ヴュルツブルク市観光局観光用地図による。居住地付近の詳細は Google map を参照されたい。

24) 高橋 上掲論文 4 ページ。

さて、石黒等が訪れた春の居宅は、上述のようにかつて綱常が留学生活を送った家でもあった。綱常は1872年冬学期および1873年夏学期・冬学期をヴュルツブルク大学医学部に学籍登録したが、この期間の住所は大学医学部近くのインナー・グラーベン (Innerer Graben) 45番地と大学医学部からはやや離れたライベルトガッセ (Reibeltgasse) 16番地の2ヵ所であった²⁵⁾。他方、春の居宅住所は1888年5月5日の「滞在届け」中のヘッヒベルガー通り (Hoechbergerstr.) 3 1/2が最初の記録であり、同年冬・夏学期の学籍登録住所とも一致している。しかし、1889年夏学期の学籍登録住所はヴュルツブルク駅近くのバーンホフ通り (Bahnhofstr.) 15番地に転居している。したがって、父子の共通する住所は見当たらないが石黒等が1887年9月17日に訪ねた春の居宅は上記の父の2ヵ所のうちのいずれかでありし、大学医学部に近いインナー・グラーベンの公算が高い。(図1)

Ⅲ-3 「滞在届け」・ヴュルツブルク大学医学部学籍登録および学友たち

1) 春の「滞在届け」

当時、ドイツ国内における在留外国人は現在ほど厳密な転入・転出届け (Anmeldung, Abmeldung) が義務付けられていなかったとしても、在留外国人にとっては必要なことであった。因みに、森の『独逸日記』中の1887年5月25日の事項では「警察署に至り、滞府の事を陳ず」²⁶⁾とあることから明らかである。それ故、もし、春のベルリン滞在が短期間でなければ当然、ベルリン市内の警察署にかれの「滞在届け」が残され、ヴュルツブルク市に転入した際にベルリンからの「転出届け」が残されているはずであるが両市とも戦災による公文書の焼失が大きいために、今となっては全く不明である。そのような中で、春がドイツへ入国した時からすでに4年3ヵ月が経過した1888年5月5日付け「滞在届け」が発見できたことは幸いのことであった。恐らく、この頃、春は最初の学籍登録をヴュルツブルク大学医学部に提出する準備上、「滞在届け」を必要としたのであろう (写真1)。春の「滞在届け」(Anfenthaltsanzeige) には次のような事項が記載されている (表1)。

以下の「滞在届け」の記載事項のうち、一番問題なのは指摘したように「到着日」に対する回答である。ドイツ滞在すでに4年間、どこの大学にも学籍登録をせず毎日どのような生活を送っていたかは皆目不明である。

2) ヴュルツブルク医科大学への学籍登録と学友たち

春がはじめて学籍登録したヴュルツブルク大学は歴史のある伝統的であり、大学のHPによれば、その創立は1402年にまで遡る。また、医科大学 (医学部) は1582年には他の神学部、哲学部、法学部と同時期に創立している。周知のように幕末にオランダ商館医師として来日したシ

25) ヴュルツブルク大学調べによる。

26) 森 前掲書 112ページ。

写真1 春の「滞在届け」(1888年5月5日付)

Hashimoto Hasime

Aufenthaltsanzeige.

Nachname	Hashimoto Hasime
Vorname	Hasime
Alter	geb. 1864
Religion	Shintō
Heimat	Tokyo Japan
Wohnung	Wiesengasse 3 1/2
Wohnort	Wiesengasse 4 Japan
Stand	Student
berufliche Tätigkeit	unbekannt
angehörige Familienmitglieder	Keine
ausgestellt von	Hasime

Wiesengasse 5. V. 1888
(Unterschrift)
Hasime Hasime

出所) ヴェルツブルク市役所資料による。

表1 春の「滞在届け」(1888年5月5日)

氏名 (Vor-und Zuname) : Hashimoto Hasime
身分あるいは職業 (Stand oder Gewerbe) : 私費留学生 (Privatstudent)
年齢 宗教 : 1867年生まれ 仏教 (Hindu)
出生地, 裁判地あるいは所轄警察および国 (Heimat Gericht oder Polizeibehörde und Land) : Tokio Japan
居住通り名および家屋番号 (Wohnung Strasse und Hausnummer) : Höchbergerstrasse 3 1/2
到着日 (Tag der Ankunft) : 既住4年 (4 Jahr hier)
滞在目的 (Zweck des Anfortshalts) : 学業
今後の滞在期間 (beabsichtigte Dauer des Anfortshalts) : 未定 (unbestimmt)
家族成員, 随員の氏名, 年齢, 身分 (einzelne Familienmitglieder und des sonstigen Gefolge Vor-und Zuname ; Alter und Stand) : 独身 (ledig)

注) 原文の書体は筆記体であり, 春の口頭回答を担当者が記録したものであろう. 判読には友人のアウグスブルク大学名誉教授 H. Hillenbrand 氏の助力を受けた.
その他, Hasime Hashimoto のサインおよび後年, 1889年9月, 「エアランゲンへ (Nach Erlangen, Sept. 89)」の役場担当者の転出先および日時の記事がある.
出所) ヴェルツブルク市役所資料による.

シーボルトはヴェルツブルク近郊の生まれであり, 同大学医学部出身で, のちに同学部で教鞭をとった. かれは日本近代医学に多大な貢献を果たしたが, 大学本部近くの木立の中に立つかれの胸像に日本からの医学留学生らは敬愛と感謝の念を捧げたことであろう²⁷⁾. さらに, 後年 (1895年), 同医学部のレントゲンがエックス線を発見し第1回ノーベル賞 (1901年) を受賞したことでよく知られている. 春は過ぎ去った4年間のドイツ生活を反省・回顧しつつも, このような権威ある医学部で学べる喜びにしばし浸ったことであろう²⁸⁾. 春が下宿先から大学に通学するときには, 丘陵地に連なるブドウ畑や静に流れるメイン河の川面を見ながら時折, 日本を思い出していたことであろう. 同級生には伊藤琴三 (87年冬学期, 88年夏学期), 宮下俊吉 (夏, 冬学期), 藤野正太郎 (88年冬-92年冬学期), 金杉英五郎 (89年夏, 冬学期), 北川乙治郎 (88年冬学期, 89年夏学期) が学籍登録をしていたので時には杯を交わしながら苦勞話を語り合ったことであろう²⁹⁾.

1888年は上述のように春がはじめて大学の学籍登録を開始した記念すべき年であったが, 春と関わる人々にとっても記念すべき年となった. まず, 4月11日, 森を陸軍に推薦した大学同期生の小池正直がドイツ留学に出発し, 5月25日, ベルリンで森と久しぶりの再会を果たした. 恐らく小池は出発前, 上司でもある橋本綱常から息子春の指導を頼まれていたと思われるので, 森との歓談の中でも春のことが話題にされたと思われる. 7月5日には, 石黒, 森はベルリンを立

27) 石黒, 谷口, 森は1887年9月17日午前中, 春の居宅を訪ねた後, シーボルトの胸像に拝礼しホテルへ戻った.

28) 現在の医学部は駅前のレントゲン通りにあり, その中にレントゲンがエックス線を発見した実験室が保存されている.

29) 帰国後, 宮下は眼科医, 金杉は耳鼻咽喉科医・東京慈恵会医科大学初代学長, 北川は外科医・名古屋県立病院長として足跡を残した.

ち、帰国の途についた。とりわけ、森にとっては4年ぶりの帰国であったが胸中複雑な気持ちであったことは周知の事実である。愛するエリーゼと東京で再会出来る喜びとともに不安が混在していた。そしてその不安は最悪の結果となるが、この時は期待の方が心を占めていたことであろう。他方、石黒は橋本綱常から出発前に春の生活状況の如何によっては後述のように石黒の帰国時に連れ帰ってほしいと依頼されていた。しかし、上述したように昨年9月、ヴェルツブルクで春に会い、下宿先の老女からも春の勉学専心と品行方正を聞き、さらに、本年、春が大学学籍登録を済ませたことで石黒の春への心配は杞憂に終わりつつあった。むしろ、今は帰路の車中で森から打ち明けられたエリーゼ来日の話に肝を冷やされたことであろう。

さて、綱常、石黒、春の関係を上述したように推論するならば、先の高橋陽一の「石黒日乗」研究における次のような事実も理解されよう。すなわち「ところで橋本春につきましては「石黒日乗」に不思議な記載があります。明治二十一年九月五日、アヴァ号は日東七客を乗せていよいよ下関から周防灘に入りますが、この時石黒はあちこちに打つ電信案を記しています。橋本軍医総監へのものは「八日朝横浜エ着^{西村上}日午後四時新橋エ汽車ニテ帰ル。初君ハ帰ラヌ。同伴連^レ来^ラヌ」とあり×印のところは見消になっています。」³⁰⁾この橋本電信案につき高橋は「西村」が西村新七の経営する横浜の旅館であり、「初君」は電文別案（「石黒日乗」の巻末余白に記載）から「春君」と特定している。高橋によるこの電文案の発見は綱常・春父子の関係と石黒の役割を知る上できわめて重要なことである。高橋はこの電文案は綱常が石黒に春を一緒に連れ帰ってくれるようにとの依頼に対する石黒の対応結果と見るのはまことに正鵠を得ている。さらに、高橋は綱常が石黒に依頼した日時を石黒が「日乗」に巴里で「橋本氏ノ電信ニ接ス」と記した出航6日前の7月23日を有力な推定日とされている³¹⁾。綱常は春が数年遅れたとは言え大学に学籍登録して数ヶ月しか過ぎない時期になぜ石黒の助力を得ても帰国させようとしたのであろうか。たいへん不可解な行動と言うしか言いようがないが、綱常のこの行動を最も合理的に理解するとすれば、春への期待に反して春についての著しく好ましからざる情報を入手したためであろう。それは春の日常生活圏内で互いに交流関係のある学友などから綱常に親しい知人・部下などを通じて伝達された可能性が高い。しかし、その情報が綱常に達した時点では、事実——たとえば女性問題——とはかけ離れ、歪曲された情報に変質していたことも十分考えられる。鷗外『独逸日記』でも述べられているように留学生同士間における反目や密告などは日常茶飯事であり、このことは公費留学生谷口が私費留学生武島の下宿代未払い問題を福島駐在武官に言いつけたことなどからも推察出来よう。しかし、いずれにしても石黒に依頼し春を連れ戻そうとした綱常の企ては不発に終ることとなった。綱常は石黒の帰国後、かなりくわしく春の生活環境を聴取した結果であると思われるが、春の指導監督はミュンヘン大学で在外研究中の小池正信に委ねられること

30) 高橋 (2006) 3-4ページ.

31) 高橋 上掲論文.

写真2 旧大学病院の中庭噴水と解剖学教室・薬局の旧建物



注) 現在でも、1854年に大学病院が作られるまで大学の病院となっていた財団法人ユリウスシュビタール病院の中庭にあるヤコブ・ファン・デア・アウヴェラ作のパロック風噴水と旧解剖学教室と薬局のあった建物を見学できる。
出所) Kraus Schinagled., 吉原信子訳『ヴェルツブルク さまざまな角度から』Elmar Hahn verlag, 2. Aufl. 41ページ。

となった。次節で取り上げる小池書簡「ベルリン賤女」に関連して小池の行動について調査した上田正行は小池の「烏城紀行」（「中外医事新報」212号—明治21年1月25日、213号—同年2月10日および「東京医事新誌」566号—明治22年2月2日同時公表）を見つけた。残念ながら筆者は同資料を未見のためここでは上田の分析を紹介させていただくが³²⁾、小池は実行力の優れた人と見え、小池から石黒への書簡（明治21年11月3日付け）で10月26日、在住地ミュンヘンから烏城（ヴェルツブルク）に私事で赴いたことを伝えた。小池は同日および翌日を春の寓居に泊まり、二十七日には春の案内でヴェルツブルク医科大学と病院を見学し（写真2参照）、その後、北川、里見（学籍未登録）を訪ね、翌二十八日には、橋本父子の旧寓に Knaub 夫人を訪ねた後、橋本、北川、里見の3人で会飲しミュンヘンへ戻った³³⁾。この小池の行動から見て、今回の小池のヴェルツブルク訪問の目的は綱常の息子春への情を胸に春の気持ち、とりわけ交際女性への気持ちを確認し、何とか交際の継続を断念させ医学への精進を指導したに違いない。小池の上記紀行文から上田が引用した次の一文、すなわち、「是ヨリ机ニ対シ臍ヲ交ヘ談論幾ント宵ヲ徹ス」は小池も春も真

32) 上田 前掲書 206-207ページ。

33) 上田 上掲書 207ページ。

剣勝負の対話であったことを彷彿させている³⁴⁾。

春には直接関係ないが、年末の12月2日には山縣有朋、賀古鶴所らは欧州視察に向けて日本を出航した。周知のように賀古は森の無二の親友であり、エリーゼの件についても森は賀古に心の内を吐露していた。したがって、もし、エリーゼが帰国後、森が彼女と在独者の誰かを通じて何らかの話し合いを必要としたならば賀古鶴所をおいて他にはあり得ないし、況や、小池に依頼することなどは二人の関係から見ればあり得ないであろう。

新たな年を迎えた1889年、春は夏学期の学籍登録を同医科大学に行い、下宿先も駅近くのバーンホフ通り15番地に転居した。同学期の医学留学生には春の他、藤野正太郎、馬越徳太郎 (89年冬学期-93年冬学期)、長与称吉 (89年冬学期-93年夏学期)、大西秀次 (89年冬学期-92年夏学期) が学んでいた。

Ⅲ-4 小池正直と「ベルリン賤女」の書簡

小池は1889年4月1日からの大学の春休みを利用して「伯林へ二ヶ月許逗留之由ニ御座候」と4月2日付けで落合医務局課員宛書簡で伝え、伯林滞在中には賀古やドイツ軍医総監ロツツベツギと時々歓談していたことも伝えていた³⁵⁾。さらに小池は、4月16日付け書簡を石黒宛に送った。この書簡がいわゆる「ベルリン賤女」の書簡であり高橋によって「不円文庫」の中から発見された。高橋は「日本醫事新報」4181号 (2004年6月12日号) において、その内容を紹介した³⁶⁾。その後、2005年2月23日付け「朝日新聞」紙上において鷗外研究家山崎國紀による紹介・解説文が掲載され広く人々の注目することになった。この書簡によって橋本春の名は長い眠りから覚めたようにわれわれの眼前に現れることになった。ここでは書簡全文の引用は省き春と森に関する点のみを引用するので全文は他書を参照されたい³⁷⁾。

この書簡は全体が3つの段落からなるが、第2、3段落の冒頭には○印を付けている (上述の落合宛書簡も同様である)。第1段落はロツツベツギと菊池軍医の話題であり、続く第2段落では、まず、大学休業中のため帰朝や転学の留学生に押しかけられた当惑話に関連して「橋本春君モ烏城ヨリ被参十四五日間逗留之積ニ御座候」と述べる。春のミュンヘン訪問は、明らかに昨年秋のヴェルツブルクでの小池との夜を徹しての話し合いの結果であり、春の小池への信頼感の表れともとれる。恐らく小池は春のドイツ医学習得がいかに日本の将来にとって有意なことであり、そのためにも交際女性との離別を諭し、心機一転、ミュンヘン医科大学への転学を勧めたのであろう。上記引用文につづいて小池は「兼而小生ヨリヤカマシク申遣候伯林賤女之一件ハ能ク吾言ヲ

34) 上田 上掲書 207ページ。

35) 青木 (1940) 51ページ。

36) 高橋 (2004) 39-41ページ。

37) 山崎 (國) (2007) 93-98ページ。林 (2005) 121-125ページ。上田 (2006) 201-213ページ。

容レ今回愈手切ニ被致度候是ニテ一安心御座候右ニ就テハ近日総監閣下へ一書可さし出候」と述べる。小池がここでかねてからやかましく言ってきたのは春に対してであり、森とは考えられない。森とエリーゼの問題も「伯林賤女之一件」とも言えるが、それはすでに彼女の帰国によって決着された過去の問題であり³⁸⁾、この時点で問題になるのはヴェルツブルクにおいて伯林生まれの女性と交際していたかあるいは当地と伯林を往復して伯林に住む女性と交際していたと言う歴然とした事実である。石黒も綱常も気がかりな問題を小池が正面突破によって解決へと導いた誇らしささえ感じる書簡である。ここで小池が使用した「賤女」とは現在では廃語とも言える表現であるが、由緒正しい名門の出自である春が交際するにはふさわしくない女性と言う意味と解したい。さらに、書簡の第3段落では森への書簡を開封同封し、石黒の御一読後、森への転送を依頼する内容でありここでは省くので他書（脚注37）を参照されたい。

IV ミュンヘン留学の挫折と失意の帰国

1889年9月、春はかねて橋本から勧められていたと思われるミュンヘン医科大学への転学を目的として長い間生活の舞台であったヴェルツブルクに別れを告げた。直接、ミュンヘンへは向か

38) 本稿は橋本春をテーマとしているので鷗外の恋人エリーゼ・ヴィーゲルトについて深入りするつもりはないが、いくつかの点について触れておきたい。

① 周知のように、これまで、永年にわたり多くの先人がエリーゼの素性さがしに努力されてきた。中でも2000年に発表された植木哲のシリング通り38番地の仕立て屋ヴィーゲルトの娘、ルイーゼとする説はかつて独文学者金子幸代が指摘したものであるが、2010年に発表された今野勉の研究成果によって最終局面を迎えることになった。植木、今野両氏の研究はいずれも実証研究としてすぐれていたが、なぜ、日本人滞時に実名をなごらなかつたかは氷解し得なかつた。2011年春、六草いちかによるエリーゼ・ヴィーゲルトの発見によってまさにゴールに到達した感動を得た。六草も指摘しているように『舞姫』中のエリスの母の故郷であるステッテン (Stettin, 現、ポーランド領シェチェン、ベルリン北東約130キロ) 生まれであること。このような鷗外の作中の地名と人名が現実を反映していることは『舞姫』の主人公太田豊太郎の太田が『独逸日記』に登場し、ドレスデンで客死した武島務の郷里である埼玉県秩父郡旧太田村に由来することを想起させる。さらに、来日時の年齢が21歳であること、帰国した10年後、喜美子に言い残した通りブルーメン通り18番で帽子製作業を経営していたことなど来日者エリーゼその人以外に考えられない(植木(2001)、金子(1986, 1992)、今野(2010)、六草(2011)を参照)。また、六草の書物に対する山崎一穎(2011)の「書評」は、今回の六草の調査結果を高く評価し、今後の課題について多くの示唆を示している。筆者も今後、エリーゼの血縁者の証言や林太郎からの文通文書等の発見などを期待したい。

② さらに、六草は触れていないが、興味ある事実は、上記のブルーメン通り18番は現在のシンガー通りであり、ルイーゼのシリング通り38番とは約200メートルと近距離であり、シリング通りからブルーメン通りに出た通りの反対側には1886年2月22日に森が田中とA. Dumasの新作Deniseを観劇したResidenztheaterがあった。奇しくもルイーゼとエリーゼは同姓であり、仕立て業と帽子製作業と関連業種でもあり、両人は顔見知り、あるいは知り合いであったとも夢想されよう。何時の日かエリーゼの墓前を訪れたいものである(ベルリン市街地図1899-1921年は同地図刊行会(2002)を参照)。

わずニュルンベルクの約18キロ手前に位置するエアランゲン (Erlangen) で下車し、しばらく滞在したと思われる。その滞在目的は不明であるがヴェルツブルクでの学友である金杉英五郎が89年冬学期をエアランゲン大学に学籍登録しているのもので彼を訪ねたのかも知れない。

春は新たな夢をもってミュンヘン大学医学部の89/90年冬学期の学籍登録を済ませ、フリーゲン通り1/11の下宿に落ち着いた。

当時、同大学医学には柴田耕一 (1888年冬学期, 1890年冬学期, 1891年夏学期), 岩佐新 (1885年冬学期から1893年の冬学期, ただしハイデルベルク大学での5学期を除く), 長与称吉 (1888年冬学期, 1889年夏学期, ヴェルツブルク大学 (1889年冬学期から1892年夏学期), 松本鵬 (1888年冬学期-1890年冬学期, フライブルク大学1891年夏学期-1892年夏学期) が在籍していた³⁹⁾。したがって春と同学期を過ごしたのは長与以外の柴田, 岩佐, 松本の3人であった。これらのうち, 岩佐は男爵岩佐純の嫡子であり, 松本は松本良順の次男であった。また, 長与は専齋の嫡子と日本における名医・名門の師弟たちであった。それだけに彼らのプライドが互いの友情を育んだかどうかは疑問である。また, 春の学籍登録期間には医学以外に自然科学分野で堀鉞之丞, 佐々木忠次郎, 豊永眞理が留学していた。

1889年も無事に終わり, 1990年2月頃, 春はただならない病魔に見舞われたようであったが正確にその病状を伝えるものではなく, つぎの春のことと断定はできないが状況的には春のことと思われる『男爵小池正直』中の佐々木忠次郎の回想談話 (昭和10年6月日記録) が残されている。

すなわち「前文省略 総監が一つ非常に困られたことがある。之れは外でもありません。ミュンヘン市に滞在中某学生が或る病気に罹り, 総監と小生が其看護に當つたが, 當時は冬であつて雪がチラチラ降り, 寒気が餘程強かつた。然し総監と小生と二人が終夜全力を盡して看護いたした所が, 二人共餘りに力をだしたが為全身汗ミドロなつてから, 二人とも「シャツ」一枚となつたことがある。続文省略」⁴⁰⁾。小池が留学生のうち, これほどの看護をする対象者は春以外には思い当たらない。この時期に春は体調不良により急遽日本へ帰国することになったのは事実である。春のこのただならない帰国についてさまざまな噂を生んだことも十分に考えられるが, はじめて触れたのは上述したように宮岡謙二であった。かれは1954年の書物で「橋本綱常のむすこで幕末のなだかい志士, 左内の甥にあたる春という男は, 家業の医者をつぐ為ミュンヘンに留学していた。ところが過度の勉強がたたり明治二十三年二月とうとう気が狂つてしまい, 生ける屍ばねとなり帰国している。」⁴¹⁾と述べ, さらに, 1978年の書物では「橋本綱常のむすこで, ……以

39) かねて石黒よりミュンヘン大学における日本人留学生について調査を依頼されていた小池は, 6月22日の書簡で次のように報告した (医学の松本は省かれているが上述参照, 青木 (1940), 55-56ページ), 横山又次郎 (古生物学), 村岡範為馳 (理学) 河村讓三郎 (法学), 村野三十郎 (山林学), 豊永眞理 (農学) の皆無事を伝え, さらに, 他大学に転学した者とエーナ (イエーナ) 大学の留学生を報告した。

40) 青木 前掲書 70ページ。

41) 宮尾 (1954) 112ページ。

下、上述引用同文……折からここには、橋本のほか名医の倅たち—松本順の鷗、岩佐純の新、長与専齋の称吉が、故国における父の名声をけがすまいと、いずれも競争のかたちで猛勉強中であった。橋本は、ささいな青春行状記を日本に密告され、父親から小言をくったのを気にしたのと、なにより過度な勉強がたたりに、明治二十三年二月……以下、上述引用同文⁴²⁾と加筆した。宮岡がどのような資料または伝聞からこのような春に関する情報を入手したのかをすでに確認する手立てはないが、すでに見てきたようにかなり事実を反映するものである。ただ青春行状記の内容はさだかでないが春のヴェルツブルク時代の女性との交際問題を意味するのであれば、この時点ではすでに過去の問題であろう。また、密告者を詮索することもあまり意味ないが、すでに上述した両大学時代の同級生が軽口立てでしゃべったことと思われる。後年、編纂された『橋本伝記』には「長男長勝氏は……独逸に留学されたが、数ヶ月後脳病の為歸朝され、或いは入院し或は小磯の別荘などで養生された⁴³⁾」と伝えている。ミュンヘンでは小池が春の面倒を見ていたのであるから春の病状は大学医学部でも治療の施しようのない状況だったと推測できる。このような経緯を経て春の留学は失意のうちに終焉を迎えることとなった。帰国後、綱常ははじめ恐らく日赤病院の総力をあげて春の治療に当たったが完治するには至らなかった。

V おわりに

橋本綱常の長男長勝、通称春は帰国後7年が経過し30歳を迎え、両親、家族の介護にも拘らず嫡子の継続が難しくなり1897年12月7日廃嫡の手続きがとられ、1909年次男長俊(1882-1941)が子爵を継承した。綱常は1907年2月18日薨去し、長谷寺(曹洞宗永平寺東京別院)に埋葬された。享年65歳であった。以後も春は母と大井町で生活し1929年6月9日、享年45歳の短い人生を終った⁴⁴⁾。

冒頭にも述べたが筆者が橋本春の生涯に関心をもったのはヴェルツブルク大学での在外研究中の1997年の頃なので、すでに15年近くが過ぎてしまった。その間、何たびか執筆を試みたが春に関する資料は余りにも残されていなかった。しかし、筆者の残りの人生にも限りがあるため今回筆を執った。明治留学生は現在とは異なり予想を超えた厳しい生活を送ったことであろう。春も元気にドイツ留学を達成して帰国したならば父の偉業に並ぶ足跡を残すことが出来たことであろう。これで筆者は明治期の国際人流の一翼をになった三人の生涯の足跡に触れることが出来た。その最初の人物は日韓お雇い英国人T. E. N.ハリファックス(Hallifax, 1842-1908, ソウル外人墓地に埋葬)⁴⁵⁾、ついで鷗外『舞姫』太田豊太郎のモデル武島務(1863-1890, ドレスデン市マテウス

42) 上掲書 226ページ。

43) 日赤病院 前掲書 134ページ。

44) 上掲書 135ページ。

教会墓地に埋葬), そして今回の橋本春である。はるか昔日の人たちであるがご冥福を祈り擲筆とする。謹んで本論文をご定年を迎えられる川島康男教授にささげたい。

付表 橋本 春相関略年表 (1867-1883年)

西暦 (年号)	年齢 (春)	事 項
1867 (慶応3) 年	1	父, 橋本綱常 (長兄に橋本左内), 母, 操子の長男, 長勝 (幼名春, 以下, この親称で記す)。誕生地福井。
1871 (明治4) 年	5	大阪にて綱常, 母堂 (梅尾刀自), 妻子居住。年末, 東京小石川へ転居。母堂は福井に帰郷。
1872 (明治5) 年	6	7月, 綱常, ドイツ留学。早稲田喜久井町に転居。母堂, 綱常と同居。10月, 綱常, ベルリン医科大学に学籍登録。
1873 (明治6) 年	7	9月, 綱常, ヴュルツブルク医科大学へ転学。冬学期 (73/74) 学籍登録時住所, Innerer Graben45。夏学期 (75) 住所, Reibeltsgasse 16。
1875 (明治8) 年	9	8月, 綱常, 維也納 (ウイーン) 大学に転学。
1876 (明治9) 年	10	4月, 綱常, ヴュルツブルク医科大学へ帰校。住所不明。
1877 (明治10) 年	11	6月, 綱常, 帰国。市谷見附内に新居購入 (雨宮敬次郎の仲介)。
1879 (明治12) 年	13	春, 父の指示で漢学修業のため天津領事竹添進一郎に同伴, 天津に留学。
1883 (明治16) 年	17	12月25日, 綱常, 大山陸軍卿の欧州各国兵制視察の随員となる。
1884 (明治17) 年	18	2月16日, 春, 父の欧州出張に同伴しドイツ留学。松平康 (学籍未登録), 難波一 (学籍未登録), 郷誠之助 (ハイデルベルク大学84W-90W), 岩佐新 (ミュンヘン大学85W-フライブルク93W) 等を同伴留学。綱常一行7月13日, ベルリン着。ドイツに70日間調査に専念。 8月24日, 森林太郎, ドイツへ出発。 8月25日, 綱常, ベルリン出発。ジュネーブの第3回万国赤十字総会出席。 10月11日, 林太郎ベルリン到着。12日, 林太郎, 綱常を訪問。 10月18日, 林太郎, 綱常のベルリン出発を見送る。綱常ウイーン, パリ, ロンドン, 米国を経て帰国。 10月22日, 林太郎, ベルリン発。ライプニッツに到着。ベルリン滞在中, 春に会う機会なし。
1885 (明治18) 年	19	1月25日, 綱常, 帰国。春のヴュルツブルク転居の時期不明。
1886 (明治19) 年	20	8月, 谷口謙 (ベルリン大学87S, 87W-89S), ドイツ留学に出発。
1887 (明治20) 年	21	5月28日, 石黒忠恵, ドイツへ出発。名倉幸, 学籍登録 (ベルリン大学87W, ヴュルツブルク大学87W)。 9月16日, 春, 名倉, 旧東大生多田某はヴュルツブルク駅頭に石黒, 森, 谷口を出迎。翌日, 石黒, 谷口 (推定), 森, 春宅 (父の旧下宿, 住所, 上掲の何れか) 訪問。下宿の主婦 (Frau Knaub?) は石黒等に春の生活・勉学態度良好と報告した。

45) 金田 (1993) 第9章。

- 1888 (明治21) 年 22 5月5日, 春, 役場へ「滞在届け」(Anfenthaltsanzeige)を提出。住所, Höchberger. 3 1/2. 到着日に対する記載は4年(4 Jahren hier.) ヴュルツブルク医科大学には, 春の他, 伊藤琴三(87W, 88S), 宮下俊吉(87SW)学籍登録。
4月11日, 小池正直ドイツへ出発。5月25, ベルリンで森と再会。
6月, 小池, ミュンヘン大学ペッテンコーフェル教授より衛生学を学ぶ。7月5日, 石黒, 森ベルリン出発。帰国の途に就く。春, 冬学期(88/89)同医科大学に学籍登録。住所同上。他に同学期医学留学生, 藤野正太郎(88W-92W), 金杉英五郎(89S, 89W-Erlangen, 90W, 91SW), 北川乙治郎(88W, 89S)。
9月5日, 石黒, 帰国船「アヴァ号」より綱常宛電文送信。その電文案中」には「初君ハ返ラヌ。同伴連レ来ラヌ」と記す。
9月8日, 石黒, 森等帰国。12日, 森の恋人, Eliese Wiegert (エリーゼ・ヴィーゲルト) 横浜港に上陸。
10月26日, 小池から石黒への書簡(11月3日付)中, 「明治二十一年十月二十六日, 私事ヲ以テ烏城ニ赴ク」とあり, 同日及び翌日を春の寓居に泊まる。二十七日, 春の案内でヴュルツブルク医科大学と病院を見学し, 北川, 里見(学籍未登録)を訪ねる。翌, 二十八日, 橋本父子の旧寓に Knaub 夫人を訪ねた後, 橋本, 北川, 里見の3人で会飲し, ミュンヘンに帰る。
12月2日, 山縣有朋, 賀古鶴所ベルリンへ出発。
- 1889 (明治22) 年 23 春, 夏学期(89), ヴュルツブルク医科大学に学籍登録。Bahnhofstr. 15へ転居。同学期医学留学生は春の他, 藤野正太郎, 馬越徳太郎(89W-93W), 長与称吉(89W-93S), 大西秀次(89W-92S)。4月, 小池, 2ヶ月間ベルリン逗留(4月2日付落合医務局員宛小池書簡)。
4月16日付石黒宛小池書簡で, 春のミュンヘンの小池訪問予定と春と「ベルリン賤女」との手切成功の見通しを告。春の旅行計画はミュンヘン大学への転学(89W)のための事前準備の公算大。
6月22日, 石黒宛小池書簡にてドイツ留学生名簿(石黒依頼)を報告。柴田耕一, 岩佐新, 長与称吉(医学), 横山又次郎(古生物学), 村岡範為(理学), 河村讓三郎(法学), 野村三十郎(山林学), 豊永眞理(農学)皆無事。筒井チューリッヒ, 佐伯エーナ, 朝山ドレスデンへ転学。エーナ留学生佐伯理一郎, 松井武太郎, 平野光太郎, 笠原親文(医学), 安田登(哲学), 伊知地徳之助(農学), 平井昌雄(政治経済学)。
9月, 春, ヴュルツブルクを転出, Erlangen (エアランゲン, 18キロ南東にニュウレンベルク)へ向かう。当地での滞在目的不明, 春冬学期(89/90), ミュンヘン大学に学籍登録。Fliegenstr. 1/11に居住。同学期医科留学生は春の他, 岩佐新, 松本鵬。なお, 医科以外では, 堀鉞之丞(化学), 佐々木忠次郎(動物学), 豊永眞理(化学)。
- 1890 (明治23) 年 24 2月, 某学生(春の公算大)発病, 小池, 佐々木忠次郎が終夜全日介護(佐々木記録)。程なく, 春, 脳病のため帰国。
10月末, 小池, 帰国へ。
12月6日, 小池帰国。
- 1897 (明治30) 年 31 12月7日, 橋本家長男長勝を廃嫡。
- 1907 (明治40) 年 41 橋本綱常次男長俊, 欧州留学。小磯別荘売却し留学費と春の保養地購入費用(東京府下大井町)に充てる。
2月18日綱常薨去, 享年65歳。墓地, 長谷寺(ちょうこくじ, 曹洞宗永平寺東京別院)。1945年東京大空襲で焼失, 再興。

1909 (明治42) 年	43	二男長俊子爵を継ぐ。綱常薨去後、夫人と春、大井町で生活。
1912 (明治45) 年	46	6月9日、春逝去。享年46歳。
1929 (昭和4) 年		7月5日、操子逝去。享年78歳。賢徳院殿恵雲妙操大姉、長谷寺、橋本家墓地に合葬。

注) 年齢は「橋本伝記」に拠り数え歳で記した。
出所) 論文末の参考文献により作成。

付記 ヴェルツブルク市公文書館保管資料の調査に当たり、友人で親日家の Hans Hillenbrand 名誉教授のご支援を受けましたことに謝する次第であります。なお、「春」のローマ字表記は本人の自署を尊重しました。

参考文献

- 青木袈裟美 (1940) 『男爵小池正直』陸軍軍医団。
植木哲 (2000) 『新説 鷗外の恋人エリス』新潮社。
上田正行 (2006) 『鷗外・漱石・鏡花—実証の糸』翰林書房。
金子幸代 (1986) 「鷗外とドイツ女性—『独逸日記』資料その4」『鷗外』38号 (11月号)。
金子幸代 (1992) 『鷗外と〈女性〉—森鷗外論究—』大東出版社。
金田昌司他編 (1993) 『国際化へのまちづくり—地域の政策研究』中央経済社。
金田昌司 (2003) 『地域再生と国際化への政策形成』中央大学出版部, 2003年。
小堀桂一郎 (1969) 『若き日の森鷗外』東京大学出版会。
今野勉 (2010) 『鷗外の恋人』NHK 出版。
高橋陽一 (2004. 6.) 「軍医小池正直の一書簡」『日本醫事新報』No. 4181。
高橋陽一 (2006. 4) 「『橋本春』について」『森鷗外記念会通信』154。
手塚晃・国立教育会館編 (1992) 『幕末明治 海外渡航者総覧』柏書房。
富田仁編 (1985) 『海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ。
日本赤十字社病院編 (1936, 1994) 『橋本綱常先生』日本赤十字社病院。復刻版, 大空社。
林尚孝 (2005) 『仮面の人・森鷗外』同時代社。
ベルリン地図帖刊行会 (2002) 『大ベルリン検索地図帖1899-1921』遊子館。
宮岡謙二 (1954, 2007) 『異国遍歴 死面列伝・旅芸人始末書』(私家版), クレス出版 (復刻版)。
宮岡謙二 (1978) 『異国遍歴 旅芸人始末書』中公文庫。
森川潤 (2008) 『明治期のドイツ留学生—ドイツ大学日本人学籍登録者の研究』雄松堂。
森鷗外 (1980) 『独逸日記』鷗外選集, 第21巻, 岩波書店。
山崎一穎 (2011) 「書評」「六草いちか著『鷗外』の恋 舞姫エリスの真実」を読む。『鷗外』89号 (5月号), 森鷗外記念館。
山崎国紀 (2007) 『評伝 森鷗外』大修館。
六草いちか (2011) 『鷗外の恋 舞姫エリスの真実』講談社。
Institut für Geschichte der Medizin, die Julius-Maximilians-Universität Wuerzburg よりの Hasime Hashimoto に関する質問に対する回答 (1997年7月28日)。
Stadtarchiv Würzburg 保管資料, Hashimoto Hasime, "Aufenthaltsanzeige, 5. v. 1888".